

## 八田與一技師に想う

土木技術者、八田與一。台湾では「恩人」「ダム之父」として今も語り継がれ、また、八田技師が総責任者として心血を注ぎ建設した台南県にある烏山頭（うざんとう）ダムを眺望する高台には、地元の人たちによって八田技師の銅像と夫妻のお墓が建てられ、毎年、與一の命日5月8日には墓前祭がとりおこなわれている。

堰堤長1273m、満水貯水量1億5000万トン、当時我が国初の工法であるセミ・ハイドロリックフィル式（半水締工法）を採用した烏山頭ダムと総延長1万6000kmもの給排水路からなる一大灌漑事業は、今からちょうど80年前の大正9年（1920年）9月に建設が開始され、10年の歳月をかけ、昭和5年（1930年）5月に竣工している。そこから注ぎ込まれる水は、当時不毛の地であった15万ヘクタールに及ぶ嘉南平野を縦横に駆けめぐり、豊かな穀倉地帯として再生させ、今なお現役の烏山頭ダムとともに地域を支える原動力となっている。

八田技師は明治19年（1886年）、金沢市に生まれ、東大の土木工学科（正確には東京帝国大学工科大学土木科）を卒業後、台湾総督府土木局に就職し、56歳で亡くなるまでほぼ全生涯を台湾に住み、台湾のために尽くした。八田技師の生涯の恩師は、廣井勇博士であるという。明治40年に東大に入学した八田與一は、東大に招かれて8年目、当時46歳の廣井勇教授から3年間土木工学を学んだ。そして何より大切な土木技術者としての精神を学んだ。

八田技師は、「他利即自利」を座右の銘にしている。廣井教授の言葉として残っている「技術者は、技術を通じての文明の基礎づくりだけを考えよ」「現場のない学問は学問ではない」という技術哲学とその背景にあった民衆の衣食足りて貧困から脱し、はじめてキリストの教えも生きてくる。そうした教訓を廣井教授は、自身が歩んできた札幌農学校時代から訪米、訪独、北海道における函館、小樽を始め数々の港湾、鉄道建設などの調査・施工といった実践を通じて、八田技師を始め教え子たちに誠心誠意指導したに違いない。

八田技師が今なお台湾の人たちに大切にされているのは、分け隔てなく常にそこに暮らす人々の幸せと繁栄を願い、技術とそれを支える精神をもってあらゆる難局に立ち向かったからに相違ない。台湾の李登輝前大統領が「台湾に寄与した日本人を挙げるとすれば、嘉南大用水路を造り上げた八田技師がいの一番に挙げられるでしょう。」と語り、民進党の陳水扁新大統領は、烏山頭ダムに隣接する台南県官田郷の貧しい農家に生まれ、「ダムがなければ豊かな穀倉地帯はなく、陳大統領は大学進学もできなかっただろう」とも言われている。真に歴史は生きている。

八田技師のことを知ったきっかけは、私が函館勤務時代に街づくりの原点を教わり、今なお次代のあるべき姿を模索し、東奔西走の活動を続けている地元コンサルの折谷泉氏からだった。折谷氏と作家の田村喜子先生は、今年5月8日、金沢市の「八田技師を偲び嘉南と友好の会」のメンバーとともに訪台し、墓前祭に参加された。訪台の理由は、「インフラ整備の原点がそこにはきっとあるはず。（折谷氏）」だった。

21世紀の私たちが歩むべき技術と精神、そして真の国際交流とは何かという命題に対して、一つの大きな灯火を照らしてくれた八田技師との出会いに感謝したい。なお、八田技師の足跡は、「台湾を愛した日本人」（古川勝三、青葉図書）、「百年ダムを造った男」（齊藤充功著、時事通信社編）などに詳しい。

（文責：梅沢信敏）

表紙右上記号 ISSN 0914-8159の説明

ISSNはInternational Standard Serial Number（国際標準逐次刊行物番号）の略で、逐次刊行物に付与される国際的なコード番号で、ISSD（国際逐次刊行物データベース）という組織のもとで逐次刊行物の組織や検索に利用されます。この番号は国立国会図書館ISSD日本センターから割り当てられたものです。